

3. 戦時下「皇軍」の「兵要地誌」と地理学者の関与をめぐって

石井素介（明治大学名誉教授）

このたび、「外邦図研究ニューズレター」第6号に掲載された拙文（「終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想—「皇軍」における「兵要地理」のあり方と応用地理学の立場—、pp.47~60）に関連して、かねてから兵要地誌類についての地道な書誌学的研究を重ねておられる碩学源昌久氏から早速三点の質問を頂きました。そこで同氏への回答を書くことになった機会に、標記の課題をめぐって私がかねてから考えていたことを、この際まとめて執筆してみることに致しました。以下の文章は源昌久氏からの三つの質問に応じた回答を、ほぼそのままの形で記録したものです。同じ課題について関心を持つ方々に参考にしていただければ幸いです。

そこでご質問の第一点（故多田文男先生が駒澤大学に遺された「多田文庫」中の「兵要地誌」（20余冊）の出所は？ について）ですが、何と言っても終戦直後の参謀本部内は、全体の状況がどうなっていたのか不明で、いささか秩序のあり方が一時的空白の状態にあったようにすら思われます。従って、故多田文男先生所蔵の「兵要地誌」がどういう経緯で多田先生のところに渡ったのかという点については、実際のところ、私にとっても全く不明であるとしか言いようがありません。当時、多田先生や関係者の誰かが参謀本部から直接持ち出すようなことが到底あり得ないことだったのは言うまでもありません。また当時、東大から「研究動員学徒」として派遣されていた学生4名（吉川虎雄・金崎肇・戸谷洋・藤井[石井]素介）には、そういう重い荷物をわざわざ多田先生のところに届ける余裕など全くなかったし、そんな余計なことを画策できる人はいなかったと思われるからです。むしろ地理学専攻学生や地理の研究者たちにとって最も関心が高く、出来れば入手したいと思っていたのは、当時「軍事機密」として専門家でも入手困難だった、軍港・演習場周辺など、いわゆる要塞地帯の精密な地形図類の方であつたでしょう。

もともと多田先生が、戦争のことや兵要地誌のこ

とに関してそれほど特別の関心を持って居られなかったことは、1943年10月から1年間、私たちが地理学教室で受講した多田先生の「アジア地誌」の講義の内容（ゴビ沙漠の砂丘地帯探検旅行の体験談など）からも明らかに推察することが出来ます。

それでは、どうしてその「多田文庫」の中に「兵要地誌」類があつたのかということになりますが、それについては以下のような推測も可能ではないかと考えられます。それは第2回目の「外邦図」搬出、つまり東北大学向けの第1回搬出に続く、資源科学研究所向けの搬出作業の前後に、地図類と共に持ち出された可能性もあるのではないかと推測です。

私自身は1945年の8月14日夕方から17日まで、連日、参謀本部第二部第七課の書類の整理や焼却作業に従事させられていたのですが、書類の山は簡単には燃えきらず、長い竹ざおでひっくり返すのに苦労した記憶が残っています。そして結局、8月17日夕刻に動員解除を申し渡され、それを最後に市谷台を後にしたのですが、その段階にはまだ処理しきれない書類の山があちこちに残されていたように記憶しています。それらの処理に要した時間が何日ごろまで継続したのか不明ですが、それほど短期間には処理し切れなかつたろうと思います。従ってそれから何週間か後に行われた「外邦図」搬出作業の際に、これらの未処理物がどの程度残存していたのか判りませんが、ある程度残されていた可能性は大いにありうると考えられます。

多田先生は、戦時中東京大学理学部助教授が本職でしたが、同時に当時文部省直轄であつた資源科学研究所との併任になっていたので、「外邦図」類の搬出物は東大でなく資源研の方に搬入されたわけです。その後、「外邦図」そのものは資源研の地理学研究室を継承した浅井辰郎氏の管轄処理に一任されたようですが、これに対して、「兵要地誌」など付属資料の一部が多田先生の手許に残されたのではないかと推測されます。多田先生は東大を定年退職された後、

法政大学を経て駒澤大学教授となり、そこで現役教授のまま逝去されたので、先生所蔵の図書資料が「多田文庫」の形で駒澤大学に遺されることになったのだと思われます。以上は私の推測ですから、あるいは思い違いの点が含まれているかもしれません。もしもまだご本人がお元気ならば、資源研の時代以来、もっと多田先生の身近かに居られた三井嘉都夫さんか誰かに問い合わせるという方法も考えられますが、如何でしょうか。

次に、ご質問の第二点（「兵要地誌」という教科について何か情報は？）ですが、残念ながらこれについてもまとまった知識はあまり持ち合わせていませんので、まともなお答えは出来ないのですが、知っている限りの知識で説明してみることにしましょう。戦時中に陸軍士官学校で使用されていた教科書の話は、明治大学地理学教室での上司であった岡山俊雄先生から見せてもらった100頁前後のものですが、正確な表題等は覚えていません。それは今回の「外邦図研究ニューズレター」第6号にも記述しておいたように（p.53）、内容的には「自然地理学概説」のようなもので、地形・地質・気候・陸水・海洋というような章節から構成されていたように記憶しています。

それは、1940年に地人書館から出版された有名な概説書『自然地理学』（上巻・下巻）の簡易版という感じのものでした。この概説書は、岡山先生が中心となって、当時自然地理諸分野の第一線若手研究者であった多田文男、渡辺光、福井英一郎、吉村信吉氏ら6人の仲間と協力して出版されたものでした。これらの共著者の多くは東大の地理学科を1930年代に卒業した人々ですが、その時代は深刻な就職難時代だった関係もあって、その内渡辺光・岡山俊雄・井上修次氏らは陸軍教官を兼ねていました。陸軍士官学校や幼年学校、海軍の兵学校や機関学校等の軍学校のいわゆる「文官教官」になるのは、当時の歴史や地理専攻の大学卒業生にとって良い就職口であったようです。上記の士官学校の教科書は、そうした教官たちによって使用されていたもので、直接戦争に役立つための「兵学」としてというよりも、むしろ一般的基礎教養科目の一つとして使用されていたのではないかと推測されます。現在の防衛大学校

における地理学教育がどのように行われているのかわかりませんが、恐らくそれほど違ってはいないのではないかと思います。

これに対して、参謀本部やその出先機関、各軍司令部の情報将校、特務機関員等の取り扱っていた「兵要地誌」なるものがどういうものであったのか、軍学校で教育された基礎諸学の知識や調査分析方法が、果たしてどのように活用されていたのか、いなかったのか、については今後大いに検討される必要があるでしょう。

その際、欧米諸国政府の戦時対応部局における地理学者の取り組みは、比較検討の意味で少なからず役立つだろうと思います。その点、かつて神戸大学にいた石光亨さんから教えられたのですが、第二次大戦下のワシントンで連邦政府が多くの地理学者を動員して編成した戦略行政局（Office of Strategic Service）の調査分析部地理情報課で働いた経験を持つ地理学者の、アッカーマン氏（Ackerman）が書いた論文（下記）はきっと参考になるでしょう。

Edward A. Ackerman, "Geographic Training, Wartime Research, and Immediate Professional Objectives", *AAAG* (Annals of the Association of American Geographers), Vol. 35, 1945, pp.121~143

第三のご質問（参謀本部の「兵要地誌概説」や現地での「兵要地誌資料」の作成に地理学者が参画していたかどうか？）については、上記の説明でもある程度お判りのように、否定的判断をせざるを得ません。

地理学者と軍部との関係が一体どうなっていたのか、どの程度のものであったのかについては、今後個別的・実証的に検討されなければならないと思いますが、日本では学者の日誌や手記・往復書簡等が公的文書館に公開保存されるという制度・習慣が存在しない（ドイツではかなりの程度習慣化されています）ので、史的検討の対象となし得る文書史料に乏しく、戦時中の実態についての追跡調査はとても困難な場合が多いのではないかと予想されます。

上述のように戦前から軍学校の教官をしていた地理学者はかなりあるのですが、この文官教官であっ

た人々が参謀本部など軍の首脳部と何かの関係を持っていた、とはおよそ考え難いというのが実状ではないかと思われます。一つの実例を挙げてみましょう。

戦時中に東京にいた地理学者のうちで、「兵要地誌」のような云わば応用地理学的「兵学」の分野に親近感を持ち、最もその分野の“好きな”人と言われている人々の愛すべき代表が渡辺光さん（通称“ギャーさん”）であったことは、戦後もしばらくの間衆目の一致するところでした。渡辺光さんは、一時士官学校教授を勤めていたこともある（戦争末期は文部省勤務、戦後は国土地理院の部長、その後お茶の水女子大学教授）ので、軍部との何らかの近い関係があったのではないかと疑われがちですが、その点は誤解に過ぎないだろうと私は判断しています。

その何よりの根拠は、いわゆる「兵要地誌」の内容が、地理学者や他分野の科学者達が積極的に関与していたにしては、如何にも素人的で、余りにも学問的でなさ過ぎるからです。陸軍の中でも陸地測量部や気象部、満鉄の調査部・水道部・地質調査所、あるいは東亜同文書院やハルビン学院等の調査資料には、貴重な科学的成果が多く含まれていますが、折角のこれらの学問的成果を「兵要」目的のために応用する段階以降になると、残念ながら厳密な訓練や分析検討を経たものとは思われない程度の、粗雑な記述によるものが多すぎるように見受けられます。

問題は、必ずしも「兵要地誌」を作成する側のみにあったわけではなく、それよりもむしろ、これらの「兵要地誌」を使いこなして作戦計画を立案し決定し司令する軍首脳部の力量なり体質のあり方の方の方であったのではないかと思われるのです。既存の近現代史等の諸研究が指摘しているように、「皇軍」の得意とする戦争遂行手法は、必ずしも地道に積み上げられた科学的データの分析に基づいた合理的判断によりながら進めるのではなく、むしろ政治的謀略や暴力的手段を多用しつつ既成事実を積み重ね、批判的意見に対しては有無を言わせぬ精神主義によって封じ込めるのが常套手法だというのであってみれば、まともな科学者の立ち入る余地がほとんど残されていないのも無理はないでしょう。

地理学者の能力が十分に活用される場があまり与

えられていなかったのは、兵役で軍隊に招集された地理学科の卒業生の扱われ方にも現れているようです。あまり詳しい実状はわかりませんが、陸軍気象部（矢澤大二氏）や南方軍司令部（能登志雄氏）などで活躍の場を得た人は例外的で、多くはただの兵役だったようです。それらの内、せいぜい暗号解読や語学能力を活用されたのはましな方だったのでしょうか。もともと軍の方が地理学者の能力を利用する積りが皆目なかったことは、大陸に出征していた中野尊正氏が、終戦の間際になってから渡辺正参謀のお声がかかりで参謀本部に呼び戻されようとしたのに、終戦になったため間に合わなかったという話を見ても良くわかります（「外邦図研究ニューズレター」No.2、pp.50～53、2004年、参照）。

以上、私の知っている限りの知識で質問事項について説明してきましたが、改めて十分に調べ上げたわけではありませんし、かなりの程度推測を交えて記述した部分が多く、満足すべきお応えになっていないのはやむを得ません。今後夫々の事項について、さらに若い人々によって実証的な検討が行われ、実状の解明が進められることを期待しています。

なお、この手紙に書きました内容を、関西方面の研究仲間の方々にも見て頂きたいと思いますので、コピーをそのまま大阪大学の小林茂先生の方にも送ることに致します。ご了承のほどよろしくお願ひします。（2009.5.23.記）

追補

この原稿は、質問への取りあえずの回答として執筆された関係で、その記述の中には推測による部分が多く含まれていましたので、念のために若干の資料に当たってみたところ、次のような記述があるのを発見しましたので、以下にその要点を追加補充させて頂くことにします。

戦時中に陸軍教授を務めていた地理学者の一人である渡辺光氏（1904～1984年）の生涯については、逝去の翌年に刊行された『渡辺光 その人と仕事』（渡辺光先生追悼録刊行会編集発行、1985年、426頁）があります。同氏は1928年東大卒業、米国ミシガ

ン大学に1年半留学の後、1933年12月から1942年7月に文部省図書監修官に転出するまでの約8年半の間、陸軍予科士官学校の教官として勤務され、地学教室を主宰されていましたが、1937年から渡辺教授の下で陸軍助教として同教室に勤務していた雨宮正氏は、同書中の「陸軍士官学校ご在職時代の渡辺先生と私」(pp.217~220)という回想文の中で、当時同校で使用されていた教科書や地学教室の様子について、次のように記述しています。

当時の将校生徒用教科書『地学教程』の内容は、「将来沢山の軍隊を動員作戦するに必要な軍用地学で、地形・地質・気象・気候・地図学・天文学・民族・国境などだったと思います。(中略)それぞれの場所の実例は先生が実地踏査された日本列島を含む大東亜地域が採用されてありました。」また当時の地学教室の環境について、「軍隊というところは階級意識が厳然たるもので絶対的な社会であったので」ですが、渡辺「先生は大へんこれをきらわれました。地学教官室内だけでも学問的雰囲気の研究室でありたいとし、地理学の学問の前では教授も助教も平等で

あるとされ、私に対しても一個の社会人であり、同じ学問を目ざす青年として認められ、和気あいあいたる内に地理学への指向を示して」下さったばかりでなく、「留学した米国で身につけられた民主主義・平等観は戦中の陸軍士官学校といえども発揮され」、上司への遠慮のない進言や弟子への権威ぶらない学問的刺激など、自由な姿勢を貫いておられたと伝えています。

また、渡辺光氏の人間性について、学会で渡辺氏と交際の深かった山本莊毅氏も、同書中の追悼文「内外の学界活動」(pp.162~171)の中で、「陸軍教授という職歴が先生に一生つきまとっていた感じがある。先生は調子にのると軍歌などを口ずさんだりするものだから、(中略)戦後の若手学者の鬨をかけたのは無理もない。天真爛漫な真に他意のない先生であったのに非常に損をし」たのだと述べておられます。

以上のように、「追悼録」のことですから、多少の誇張が含まれているとは思いますが、少なくとも私なりの推測は、当たらずとも遠からずであったと言えるかもしれません。(2009.11.20.追記)